



変わり者と呼ばれた貴族は、 辺境で自由に生きていきます 1

α L P H α L I G H T

塩分不足

enbunbusoku



アルファライト文庫



ゴルド

うで おし
腕っ節が強いグレーテル家の次男。
さじけん
豪快で、善悪の基準が
ハッキリしている。

ウィル

大貴族グレーテル家の三男。
まじけん
魔法を使えないが故に冷遇され、
へんさく
辺境の領地を与えられる。

ソラ

ウィルに長年仕えている少女。
つか
表情に乏しいが、非常に有能。

シーナ

ウィルの下で働くエルフの少女。
まか
数字に強く、経理を任されている。

ニューナ

元気いっぱい、の獣人メイド。
サバリ魔で楽天的な性格。

ギラン

かく
隠れて暮らすドワーフ族の代表。
しやう
領民を探すウィルと出会う。

ユノ

三千年を生きる最古の吸血鬼。
さいこ
ウィルを技術面で補佐する。

ホロウ

どれい
元奴隷の獣人。
あつ
ウィルに雇われてメイドとなる。

Main Characters

主な登場人物

1 変わり者ウィル

変わり者で、落ちこぼれ。

それが僕、ウィリアム・グレーテルに対する周囲の評価だ。

僕の家は王国でも有数の貴族として知られている。

生まれてくる子供は全員男性で、一人の例外もなく魔法使いとしての才能を持っていて、
代々優秀な魔法騎士を輩出している家柄……だった。

十八年前までは。

僕がこの世に生を受けるまでは。

みんなが持つていて当たり前の才能が、僕にはなかった。

貴族特有の膨大な魔力こそ備えていたけど、それを表に出す手段を持っていなかった。
より具体的に言うなら、魔力はあっても、魔法は全然使えなかった。

世界にはたくさんの国がある。

魔法技術によって繁栄^{はんえい}を得た国もあれば、科学技術の進歩に尽力^{じんりき}している国もあつて、発展の仕方はそれぞれに異なっている。

その中でも僕の生まれた国は、魔法技術のほうが発展している場所だった。

国によっては、科学技術のほうが進歩しているけど、僕の国では、魔法の力こそが国の繁栄^{つな}に繋がると信じられていた。

炎魔法、水魔法、風魔法、大地魔法……基本属性の四種に加え、光魔法や闇魔法^{やみ}、幻影^{げんえい}魔法などの特殊属性も含めれば、その種類は両手両足の指の本数を簡単に超えるだろう。

それだけあつても、僕には一つも当てはまらなかった。

五歳になったときに行つた身体検査で、僕に何の魔法適性もないと発覚した瞬間。

あのときの両親の絶望^{ぜつぼう}したような顔は、今になつても忘れられない。

その頃から、僕に対する周囲の目は変わった。

友人は皆離れていき、肉親ですらゴミを見るような目を向けてくる。

こんな毎日……僕には耐えられない。

というわけでもなかった。

周りは僕のことを変わり者だと言うけど、自分でもそうだと思う。

周囲の視線とか、心ない罵倒^{ばとう}とか、そういったことにはそれほど傷つかなかった。

そんなことよりも、興味のあることがたくさんあつたから。

良い具合に自分を誤魔化^{ごまか}せていたのかもしれない。

結局、何が言いたいのかと言えば――

それでも僕は、とっても幸せだということだ。

十

固く閉ざされた地下室に、たくさんの奴隸^{どれい}が収容されていた。

奴隸の大半は成人していない少女。

その中でも不人気なのが、亜人種^{あじんしゅ}と呼ばれる彼女たち。

人間に近いけれど、純粹な人間ではない種族だ。

人間の少女はすぐに貰^{もら}い手が見つかるが、亜人は汚らしいと言つて誰も目にとめない。もしも成人するまでに貰^{もら}い手が見つからなければ、彼女たちは揃^{そろ}つて家畜^{かちく}の餌^{えさ}にされてしまう。

誰かに飼^かわれるなんて嫌だけど、餌にされるなんてもっと嫌。

そんな矛盾^{むじはん}を孕^{はら}んだ思いを胸に、彼女たちは願^{ねが}い続けている。

願^{ねが}わくば、普通の暮^くらしができますように、と。

無理だとわかっていても、願^{ねが}うだけなら誰にも迷惑^{めいわく}はかからない。

せめて願^{ねが}うくらいは許^{ゆる}してほしい。そう思^{おも}っていた。

そしてある日――

ガチャン。

地下室の扉が開く音が聞こえた。

足音は二つ聞こえてくる。一つは管理者の男性、もう一つはたぶん奴隷を選びに来た誰かだろうと、彼女たちは思^{おも}った。

奴隷を買いに来るのは、大抵^{たいてい}がどこかの貴族だ。

コッソ、コッソ、コッソ――

足音は徐々に近づいてくる。

このフロアで唯一の重人。灰色の狼^{おおかみ}の耳と尻尾^{しっぽ}を生^はやした少女は、できる限りお利口^{りこう}さ

んでいようと、背筋^{せすじ}をピンと伸ばして座^まっていた。

誰かが来るときは、いつでもこうするように心がけている。

そうまでして買^かわれたのかと、他の奴隷少女からは白^{しろ}い眼で見^みられている。

だけど、仕方がないのだ。

それでもしないと買^かってもらえない。

自分が重人で、人間から良^よく思^{おも}われていないと知^しっているから。しかし、これまで誰も彼女の前で足を止めた者はいない。

一瞬目を向けて、尻尾や耳が目に入った瞬間、嫌^{いや}そうな顔をしてそそくさ^{そそくさ}と行^いってしま^まう。

どうせ今日も駄目^{だめ}なんだろうな……。

彼女はそう思^{おも}っていた。

突然、目の前で足音が止まる。

二つの人影が、彼女の前で足を止めたのだ。

「この娘^{むすめ}を貰^{もら}うよ」

「えっ——」

彼女は目を見開き、驚きのあまり声を漏らした。

+

「お客さんも相変わらず物好きですね。それじゃ精算していただきますようか」

「はい。その君、じゃあ、また後でね」

僕は亜人の彼女に手を振ってその場を立ち去る。

同じ地下にある別室で精算を済ませると、檻から出された彼女がやって来た。

首輪に繋がれ、汚い奴隷服を着せられたままの姿で。

「付いておいで」

「……はい」

僕は彼女を連れて地上へ戻る。

フードを被っているから、彼女には僕の顔は見えていない。

声で男だということくらいは把握できるだろう。

ただまあ、そんなことを考えられないくらい、今の彼女は驚いているだろうね。

どうして自分が選ばれたのか、不思議に思っているはずだ。

「すまないが、荷台の後ろに乗ってもらえるかな？ 揺れると思うけど、少しの間辛抱してくれ」

彼女を馬車の荷台へ案内した。

荷台には幌がかかっている、入口に布を垂らし、中が見えないようにしている。

奴隷を購入することは貴族にとってさほど珍しいことではないけど、大っぴらにできることでもない。

だからこうして、目的地に着くまでは隠す必要があるんだ。

ガタン、ガタン。

馬車に揺られること十数分。

目的地に到着したので、荷台の布をめくり、彼女に声をかける。

「着いたよ。出ておいで」

彼女は恐る恐る荷台から外に出た。

そしてその目に映ったのは、貴族が暮らしている豪華な屋敷。

閉ざされた門の柱に刻まれているのは、この屋敷を所有する貴族の名前だ。

「グレー……テル？」

「そう、ここはグレーテル家の別荘。そして僕——ウィリアム・グレーテルは、この別荘に住んでいるんだ」

そう言いながら、僕は顔を隠していたフードを上げる。

世間では珍しい薄いオレンジ色の髪は、やさしい太陽の光みたいだと言われたことがある。

瞳の色はひまわりの花びらの黄色。

僕の顔を見て、彼女は目を輝かせているように見えた。

「ようこそ！ 僕の家へ！」

僕の住む別荘は、王都から少し外れた場所にある。

別荘なのだから本宅から離れているのは当たり前なのだけれど、そんな場所で僕は八年以上暮らしているんだ。

理由は言うまでもなく、嫌われているから。

避けられているから、距離を置かれていたんだよ。とはいえ、全然寂しいとは思わない。

五歳のときに見放されて以来、ずっとこんな感じだからもう慣れてしまった。

それに一人ぼっちというわけでもなかった。こんな僕にも、一緒にいてくれる人はいる。それにほら、今日だって一人増えただろう？

「ウィル様はお人好し過ぎます」

玄関に向かうと、メイド服を着た可愛い少女が待っていて、僕を見るなり呆れ顔でそう言った。

「また女の子を誂かしてきましたね」

「誂かしてなんてないよ？ 僕はただ、彼女をうちの新しいメイドに迎え入れただけさ」

「本人の了承なしに連れて来ただけでしょ？ まったくあなたという人は……もう少し周りの目も考えてくださいね」

「ごめんごめん。これからは気を付けるよ」

そう僕が言うと、メイド服の彼女はもつと呆れた顔になった。

僕が心から謝っていないとバレているようだ。

さすがに何度も同じことを言っていると、嘘だとわかってしまうらしい。

「あ、あの……」

連れて来たばかりの少女が言いにくそうに口を開いた。

「ああ、ごめん。紹介がまだだったね？ 彼女はソラ、この屋敷のメイド長をしてくれるんだよ」

「初めまして。ウィル様の専属メイドをしています。突然のことで色々と混乱していると思いますが、どうか安心してください。ここはあなたにとって、悪い環境ではありませんから」

ソラは優しく、そして小さく微笑みながらそう言った。

名前の通りに空色をした髪に、カチューシャをつけている彼女は、僕のメイドさんで幼馴染でもある。

この屋敷の管理や、他の使用人たちの教育は、すべて彼女に一任してある。

見た目は小さくて可愛らしい少女だけれど、メイドとしての能力はグレートル家の中でも一、二を争うほどだ。

僕の生活は、彼女によって支えられていると言っても過言ではない。

「ソラ、彼女に服と食事を」

「その前にお風呂ですね」

「そうだな、じゃあ頼めるかな？」

「はい。ではこちらに——」

「ああー!! 新しい子が来てる！」

ソラが案内を始めようとすると、二階へ続く階段から元気な声が聞こえてきた。

声の主を見上げると、その視線から外れるように飛び上がって、見事僕たちの目の前に着地する。

「初めましてえ!! 今日から一緒に暮らすんだよね!? 仲良くしようね!!」

「えつ、あ、えつと……」

「こら、ニーナ。はしやぎ過ぎだよ」

「イテツ！」

元気良く登場したもう一人のメイドの頭に、僕は軽くチョップをきました。

大して痛くもないだろうに頭を押さえながら、彼女は上目遣いで言う。

「もお、叩かないでよウィル様。どうせなら撫でてほしいな」

「ちゃんと良いことをしたら撫でてあげるよ。ニーナが驚かすから、彼女が怯えちゃっただろ？」

「そんなことないよ。ねえ？」

突然の闖入者に呼びかけられ、元奴隷の少女は言い淀む。

「えつと……」

「怯えてはいませんが動揺していますね。反省してください」

「ソラちゃんにも怒られたあ！」

賑やかにしゃべる彼女はニーナという。

トラ柄の猫の獣人で、ちよっぴり見える八重歯が特徴的で、とても野生的な少女だ。

そしてニーナの尻尾と耳を見て、同じく獣の亜人である元奴隷の彼女は戸惑いを見せる。

「えっ……獣人？」

「んにや？　そうだけど？」

「……」

無言で見つめる彼女に、ニーナは首を傾げる。

するともう一つ、別の足音と声が近づいてくる。

「ニーナー、あの子ったらどこに行っちゃったのかしら。まだお掃除の途中だったのに……あつ！　こんな所にいたのね！」

「わっ、サトラさん……」

「駄目でしょう？　お仕事を抜け出しちゃ！　あら、ウィル様お帰りなさいませ」

「うん、ただいま」

おしとやかに階段を下りてきた彼女も、この屋敷のメイドの一人だ。

淡い桃色の長い髪と、包容力のある胸が印象的。

年齢は僕より二つ上で、見た目はただのお姉さんだけど、彼女も普通の人間じゃない。

セイレーンという種族で、人魚とも呼ばれている亜人の一種だ。

普段は人間の脚だけと、水に濡れると下半身が魚に変身する。

ちなみに年上ってという話をする、笑いながら怒るので注意しよう。

僕はニーナに向き直る。

「とうか、ニーナは仕事サボってたの？」

「サ、サボってないよお!？」

「声が裏返ってるんだよね。これはさらにお仕置が必要かな」

「うえーん、ごめんさいー、今から頑張るから許してよー」

「やれやれ」

そんな他愛もないやりとりをしていると、他の使用人たちも顔を出して来た。

ニーナたちを含め、様々な種族がこの屋敷では働いている。

その様子に驚いている少女が、ぼそりと口にする。

「亜人がこんなに……」

「新人さん」

戸惑いながら周りを見渡す彼女に、ソラがやさしく語りかけた。

「先に話しておきますけど、この屋敷で純粋な人間は、私とウィル様だけですよ？」

「えっ!? そうなんですか？」

「そうだよ！」

僕は胸を張ってそう答えた。

「ど、どうして？」

「どうして？ うーん、理由を聞かれてもな」

詳しく説明しようとする、僕の生い立ちから話さないとイケないんだよね。

簡単に伝えるにはどうしたらいいのか。

ちよつと考える時間を貰わないと難しいな。

「私が代わりに説明しましょうか？」

「ソラ？ できるの？」

「もちろんです」

ソラは自信あり気な表情を見せた。

彼女とは一番付き合いが長い。これなら大丈夫だと思い、頷いた。

「おほん、では一言でお答えしましょう」

元奴隷少女は息を呑む。

そして僕は、ソラを信頼して安心して見守っていた。

さてさて、僕の幼馴染は僕のことをどう紹介してくれるのかな？

期待で胸を躍らせる。

が――

「ウィル様の趣味、です」

「ブッ！」

思わず噴き出してしまった。

「しゅっ……」

元奴隷の彼女がジトーツとした目つきになる。

やめて！

そんな目で僕を見ないで！

「ちつ、違うからね！ ちよつとソラ、変なこと言わないでよ！」

「変ですか？ 間違いではなかったと思いますが」

「間違ってるよ！」

「ですが、ウィル様は巫人の方が好きでしたよね？」

「そうだけど、趣味じゃないから！ もつと言いつ方考えてよ！」

僕らが言い争っているのを、狼獣人の彼女は怪訝そうに見ている。

「ほら見て！ ソラのせいで警戒されちゃったじゃないか！」

「これは失礼しました。大丈夫ですよ？」

「は、本当ですか……？」

「はい。ウィル様は変人ですが、変なことをする方ではありませんから」

「変っ……」

そう言った少女は、今度は疑うような目で、僕をじっと見つめてくる。

まあそこは否定しないでおこう。

周りにも変わり者とか呼ばれてるし、自分でもその自覚はあるから。

でも断じて変態じゃないからね！

「と、とりあえずさつきお願いしたことを準備してもらえるかな？ それが終わったら、

屋敷のみんなを集めてほしい」

「かしこまりました。では参りましょうか？」

「は、はい！」

「あつ、ちよっと待って！」

僕は急いで二人を引きとめた。

いけない、いけない。

僕としたことがうっかりしていた。

とりとめない雑談で惑わされて、一番大事なことを聞きそびれていたよ。

「ねえ君、名前はなんていうんだい？」

「ホロウです」

少女は答えた。

とても良い名前だと、僕は思った。

「ありがとう。じゃあ待つてるね」

「……」

ホロウは無言のまま、小さく僕にお辞儀をして去っていった。

あの様子だとまだ警戒されているみたいだな。仕方がないか。

「最初はみーんなあんな風だったね」

「そう言うニーナは、出会ったときから元気だったよね」

「にやつははー。あたしはほら、相手の目を見れば大体わかっちゃうからね」

「ニーナさんの目は特別ですからね。私も最初は戸惑いました。あの娘もたぶん、そんな

んだと思いますよ」

「だろうね……」

サトラに言外に「昔は警戒していた」と言われ、若干へこむ。

ニーナはそんな僕を励ます。

「大丈夫だよウイル様！ みんなそーやって仲良くなっていっただんだから！」

「そうだね。それじゃ、君も仲良くサトラと仕事に戻ろうか？」

「うっ……」

「そんな顔しないっ！ ほら急いで、時間までには終わらせるんだよ」

「はい」

やる気のない返事をして、ニーナはサトラと一緒に二階へ上がっていった。

さてと、僕も書類を片付けてしまおう。

ホロウがこの屋敷で暮らすためには、色々と処理しなくちゃいけない課題があるからね。頭の中でやることを整理しながら、二階にある自分の部屋へ向かう。

二階にはたくさん部屋があつて、そのうち一番奥の二つが僕の部屋だ。

一つは仕事をするための執務室、もう一つは寝室になっている。

他はすべて使用人たちの部屋。ちゃんと一人に一部屋ずつ割り振っている。

僕は執務室に入り、棚に入っている書類に手を伸ばす。

「えーっと、まずはこれかな？ 居住権の申請書！」

奴隷として売られていた彼女には、この国で生きるための居住権がない。

この状態では、誰かに殺されても文句は言えない。

ひとまずこの申請を通して、彼女をこの国の民にするのが先決だ。

ただ、亜人の申請はあまり良い顔をされない。

国全体が亜人種を快く思っていないからだ。

僕は貴族だから、お金を積めばなんとか通せるんだけど、一般人には難しいだろう。

そういう理由で、この国に亜人種の居場所はない。

一時間後――

必要な書類の準備が一通り済んだ頃、ソラから食堂へ来るように呼ばれた。

食堂は一階のキッチンの隣にある。

長いテーブルが置かれていて、二十人は座れるように椅子が並んでいる。

僕は一番奥に腰掛けて、近い席にホロウとソラが座った。

他のメイドたちも順々に席についていく。

「あれ、ユノは？ この時間なら起きてるよね？」

「お呼びしたのですが、今は仕事で手が離せないそうです」

ソラが答えた。

「そっか。じゃあホロウ。彼女には、あとで僕と一緒にあいさつしに行こうか」

全員ではないが、これで僕と他のメイドたち五人、そして新たにやって来たホロウが揃った。

みんなの顔を確認してから、改めて話す。

「それじゃ、食事の前に新しい仲間を紹介するね！ 彼女の名前はホロウだ。簡単に自己紹介してもらってもいいかな？」

「は、はい！ 初めまして、ホロウです。見ての通り狼の獣人で、出身はずっと北のほうで、色々あつてその……ど、奴隷として売られて……」

ホロウは悲しそうに説明した。

言葉を詰まらせた彼女に、隣に座っていたニーナが言う。

「そんな顔しなくて大丈夫だよ。ここにいてのつて、ウイル様とソラちゃん以外、みんな奴隷だったからね」

「そ、そうなんですか!？」

「そうだよ、だから大丈夫!」

「私たちはそれぞれ奴隷となっていたところを、ウイル様に助けていただいたんです。ちょうどあなたと同じように」

サトラがニツコリと優しく微笑みながら説明した。

そしてメイドたちとホロウの視線が僕に向く。

「僕も自己紹介をしておこうか。改めて、僕はウィリアム・グレーテル、一応この屋敷の主なんだ」

「一応は余計ですよ」

ソラにツツコミを入れられた。

僕は笑って誤魔化して、続ける。

「まず安心してほしい。僕は君を、君のような亜人種を嫌わない」

ホロウは黙って聞き入っている。

「この国の人たち、特に貴族は亜人を悪だとか色々言っているけど、僕はこれっぽっちもそんなことは思っていない。むしろ魅力的だと思やし、積極的に関わりたいとも思ってるよ。つて変な意味じゃないからね!？」

魅力的、辺りでホロウの表情が曇ったので、慌てて弁解しておいた。

さつきソラに言われた「趣味」のくだりを引きずっているな……。

「あの、一つ聞いてもいいですか？」

「ん、何かな？」

「他の人たちは亜人を嫌っているのに……どうして、あなたは違うんですか？」

ホロウは理由を尋ねてきた。

まあそう思うだろうね。

他の子たちのときもそうだったから、この質問は慣れっこだ。

というわけで、他の子たちにも話したことを、彼女にも言おう。

「十三年前、になるかな？ 身体検査が終わって、魔法適性がないって結果が出て、周りから色んなこと言われてさ。一頻り落ち込んで、家出をしたことがあったんだよね」

あの頃の僕は、今ほどメンタルが強くなかった。

五歳の子供だったんだし、当然だろう。

親から罵倒され、親しかった友人にも見放され、兄弟からも避けられた僕は自暴自棄になった。

全部が嫌になって、屋敷を抜け出した。

行く当てもなく、訳もわからず走り抜けた。

「そうしたらさ。普通に迷っちゃったんだよね」

道に迷って、行き場に迷って、気が付けば見知らぬ森の中にいた。

五歳のあの頃、森の木々は巨人に見えるほど大きくて、とても怖かった。

「まだ昼間だったから良かったけど、あれが夜だったら間違いないく耐えられなかっただろうね。とても心細かったよ」

そんなとき、僕は彼女に出会った。

金髪で宝石のように青い瞳、そしてキツネの耳と尻尾を生やした幼女に、僕は出会ったんだ。

当時の僕はまだ、亜人を怖い存在だと思っていた。

そういう風に教育されていたから、食べられるんじゃないかって怖かった。

「だけど実際会ってみたら、なんてことはなかった。普通の可愛い女の子だったよ」

仕草も言葉も、僕が想像していたような恐ろしさは感じなかった。

むしろ整った容姿や、綺麗でフサフサの毛並みは、子供ながら魅力的だと感じたくらいだ。

彼女は僕に、「どうしたの？」と聞いてきた。

だから僕は話した。



これまでにあった出来事を、俯きながら語って聞かせた。

途中から涙目になっていて、自分が必要な人間なんだと思った。

何の役にも立たない。

無意味で無価値な存在なんだと……そんな僕に、彼女は笑顔でこう言ったんだ。

「そんなことないよ！ だってわたし、君とこうやって会えただけで嬉しいもん！」

「えっ……」

「きっと君には、誰かを笑顔にする力があるんだよ！」

どうしようもなく嬉しかった。

今思い返せば、筋の通っていない子供らしいセリフなんだけど、とにかく嬉しかった。

お前にはガツカリだ……とか。

お前なんて生まれてこなければ良かった……なんて酷いことを言われた後だから、余計

にそう感じたのかもしれない。

自分は生きていてもいいんだと、認めてくれたように思えたから。

僕は泣いた。

涙が洒れるまで泣いて、泣いている間も彼女は一緒にいてくれた。

泣きやんでからは、楽しい話をたくさんした。

その後は日が暮れる前に、それぞれ家に帰った。それから何度か森へ行ってみたけど、彼女とは会えなかった。結局、今日まで一度も再会できていない。

もしかすると、僕の寂しさが生んだ幻覚だったのかもしれない。

そうだとしても、あの言葉のお陰^{かげ}で僕は救われた。

そして、あの日の出来事をきっかけに、僕は亜人種に興味を持つようになった。

「以上が、僕の大切な昔話だよ」

ご清聴^{せいちょう}ありがとう、と心の中で呟^{つぶや}く。

彼女たちは静かに、そして真剣に聞いてくれた。

笑いもせず、呆れもせず、最後まで聞いていた。

僕はそれがとてもうれしい。

ホロウが納得したように頷く。

「そんなことがあったんですね……」

「うん。まあこの話をして、亜人は怖くないんだよ！ って他のみんなに言っても、全然信じてもらえないんだけどね。お陰^{かげ}さまで、『貴族の落ちこぼれ』だけじゃなくて、『変わり者』なんて呼ばれるようになったよ」

僕は笑いながら言った。

普通に聞けば笑い話ではないけど、僕は悲しくないんだと示すように、ちよつと無理に大きく笑ってみせた。

周りからなんて呼ばれようと、今の僕は気にしない。理解されなくても良い。

少なくともここに、僕のことを慕^{した}ってくれる人がある。

孤独^{こどく}じゃないから、強く生きられる。

もしも一人ぼっちになったとしても、そのときはあの日の彼女の姿を、かけてくれた言葉^{ことば}を思い出すだろう。

ずっと昔の記憶で、顔も声もおぼろげになっているし、名前すら知らないのだけれど、僕はあの日のことを一生忘れないと誓^{ちか}っている。

願わくば、生きているうちにもう一度会いたい。

会って、ありがとうと言いたい。

声が哽^かれるまで、満足するまで叫びたい。

そして、今度はちゃんと彼女の名前を聞こう。

「僕の自己紹介は以上だよ。次にみんなの紹介をしたいんだけど、その前に確認させてもらってもいいかな？」

「はい」

「君にはここ以外に、帰りたい場所はないかい？」

「帰りたい……場所？」

「そう。故郷で家族が待つてるとか、恋人がどこかにいるとか。そういうのがあるなら教えてほしい。そのときは全力で、僕が君をその場所まで送り届けるから」

そう尋ねると、ホロウは少し考えるように黙り込んだ。

無理にこの屋敷で暮らす必要はない。そこまで彼女を縛るつもりは、初めからないんだから。

やっぱり言い出し辛いかな。

もしそうなら、時間を置いてからでもいいんだけど。

「私に家族はいません。友人も……故郷を出たのは三年以上前なので、もう頼れません。だから、その……ここに住まわせてもらえると、嬉しいです」

ホロウは申し訳なさそうに言った。

少しだけ頬を赤らめて、僕の反応を窺っている。

そんな顔をしなくても大丈夫だよ。

僕の答えは、最初から一つしかないんだから。

「もちろん！ 大歓迎だよ」

僕は笑顔でそう答えた。

あの日、彼女が僕に見せてくれたような笑顔で――

2 ウィルの仲間たち

ホロウは僕たちと暮らすことを選択した。

そのことを嬉しく思い、彼女にニッコリと微笑みかける。

すると、彼女は恥ずかしそうに目をそらしてしまった。

まだ慣れるには時間がかかりそうだ。

「それじゃ、他のみんなの紹介に移ろうかな」

僕はメイドたちに視線を向けた。この場に集まってくれた僕とホロウ以外の五人。彼女たちは僕の生活を支えてくれている。

ここへ来ていない一人を除き、彼女たち以外に使用人はいない。

「ソラから順番にお願いできるかな」

「かしこまりました」

ソラは座ったままホロウのほうへ身体を向けた。

「先ほども名乗りましたが、改めまして。私はソラ、ウィル様の専属メイド兼、この屋敷のメイド長をしております。見ての通り人間ですが、重人の方々にに対する偏見は持つておりませんので、安心して下さいね」

「ソラには新人教育も任せてあるんだ。わからないことがあったら、まず最初に彼女を頼るといいよ。この屋敷のことなんかは、僕よりも詳しいからね」

「はい。よろしくお願いします」

「こちらこそ、これからよろしくお願いしますね」

二人は丁寧にあいさつを交わした。

続いて、ソラの隣に座っていたニーナが手を挙げる。

「はいはいー！ 次はあたしの番だよ！」

彼女は元気良く、そしてニコニコと楽しそうに自己紹介を始める。

「名前はニーナ！ あたしもホロちゃんと一緒に獣人なんだよ！」

「ホ、ホロちゃん？」

「うん、ホロちゃん！ あれれ？ 駄目だったかな？」

「い、いえそんなことは……ないです」

「そっか！ じゃあ良かった！」

ホロウは少し照れくさそうだ。

親しげに接するニーナに戸惑っている様子ではあるが、表情を見る限り、嫌がっているわけではない。

ニーナは最初から距離感が近いから、慣れていないとビックリするだろうな。

その上何よりビックリするのが、実はニーナは誰より人見知りだってことなんだけど。

それはまあ、いづれ教えてあげようかな。

「料理は苦手だけど、それ以外なら全部得意だから任せて！ お姉さんだと思つて頼つてもらつてもいいからね！」

「そう思つてほしいなら、サボらずにちゃんと働くんだよ？」

僕が合いの手を入れると、途端にニーナの元気はしほむ。

「うっ……ウィル様酷いよぉー」

「酷くないよ。この間なんて、僕の寝室の掃除を頼んだら、ベッドで寝てたよね？」

「あ、あれはそのお……いい感じに陽の光が入ってきて……」

「入ってきて？」

「……ごめんなさい」

「はい、よろしい」

「ふふっ」

ふと、ホロウが笑顔を見せた。

彼女はすぐにハッと気付いて顔を伏せる。

僕とニーナの他愛ないやりとりを見て、思わず笑ってしまったようだ。

「ご、ごめんなさいー」

「ホロちゃんが笑った！　ねえ見た？　ウィル様も見たよね！　すっごく可愛かったよ！」

「うん、僕も見ただよ。とても可愛い笑顔だったね」

ホロウは恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「か、可愛いなんてそんな……私なんて……」

「そんなことないよ！　とーっても可愛かった！　ホロちゃんは普通にしても可愛いけ

ど、笑ってるほうがもつと可愛いと思うな」

「僕もそう思うよ」

思いがけず、彼女の笑顔を見ることができて、僕としても嬉しい。

ニーナの明るさのお陰だな。これはあとで頭を撫でてあげてもいいかもしれない。

ちゃんと仕事をサボらなかつただけだね。

「さて、そろそろ次へ進もうか」

自己紹介は大切だけど、あまり時間をかけ過ぎると、せつかくの料理が冷めてしまう。

「じゃあ、お願い」

「はい。こんばんはホロウさん。さっきも少しだけお会いしましたね？」

「は、はい！　えっと……サトラさん、でしたよね？」

「あらあら、もう名前を覚えてくれたんですね。とても嬉しいです」

サトラはソラ以上に丁寧に、おしとやかに話している。

この中では一番の年長者で、僕にとっても他のメイドたちにとっても、彼女はお姉さん的存在だ。

「あの、サトラさんも亜人種なんですよね？」

「ええ、でも見た目からはわからないでしょう？」

サトラが言うのと、ホロウはこくりと頷いた。

「私はセイレーンなんですよ」

「セイレーン!?　あの人魚姫って呼ばれてる種族！」

「ふふっ、そう呼ばれていたこともありましたね」

ホロウはすごく驚いていた。

その理由は、セイレーンという種族が非常に数が少なく、世界でも数十人しかいないとされているからだ。

「仲良くしていきましょうね。ホロウさん」

「はい！ よろしくお願いします」

ここまで、ソラ、ニーナ、サトラの紹介が終わった。

三人とは玄関ですでに面識があっただけど、残りの二人と話すのは初めてだ。

そのうちの一人が、ニーナの隣に座っている彼女だ。

「つ、次はボクですね！」

黒茶色のたれ耳に、左右に元気良くフリフリさせている尻尾。

髪色も耳や尻尾の毛色と一緒に、椅子にちょこんと小さな身体が収まっている。

「ボクはロトンっています。えっと、一応ボクも獣人です。そ、その……よ、よろしくお願います！」

自信なさ気に話すロトン。

ボクとか言っているけど女の子で、メイドの中では最年少。確か今年で十四歳になったはずだ。

「ロトンは半年前にうちへ来たばかりなんだ。でも仕事を覚えるのがすごく早くて、もうすっかり一人前になってるんだよ」

「そ、そんなことないですよ。ボクは身体が小さくて力もないし、体力だって自信ないですし、器用でもないから失敗だらけだし、迷惑かけてばかりですから」

ロトンは出会ったときから自己評価が低い。

彼女は自分で言うほど、力や体力が劣っているわけでもないし、失敗の話だってほとんど聞かない。たまにある失敗を長く引きずってしまうタイプだ。

それは固有の性格であり、この屋敷へ来るまでに培ってしまったトラウマ故でもある。彼女に限った話ではなく、そういう負の記憶はみんな持っている。

だから僕は、そんな過去を忘れてしまえるくらい、彼女たちをたくさん褒めてあげようと思っている。

「迷惑なんてかけられてないよ。ロトンには助けられてばかりだ。他のみんなだって、そう感じているはずだよ」

僕は視線をニーナに送った。

こういうとき、一番屈託なく褒めてくれるのは彼女だから。

「そうだよそうだよ！ むしろ頑張り過ぎないじゃないかな？ ちょっとはサボった

ほうが良いと思うよ」

「こちら、ロトンさんに悪いこと教えちゃ駄目でしょ？ でも、そうね。サボるのは良

くないけど、たまには気を休めるのも大切よ」

ニーナに続いて、サトラも疲労するように話しかけてくれた。

そうすると、ロトンの表情が少しずつ緩んでいく。

僕はホロウに視線を移す。

「ロトンもそうだけど、ホロウも無理して頑張ったりしないですね？ それで身体を壊した

りしたら、そっちのほうが僕は悲しいから」

「ウィル様……はい！ ありがとうございます！」

「はい」

ロトンは元気良く嬉しそうに返事をした。

先輩として頑張らなきゃ！ と気負ってしまいそうで心配だ。

しばらくは注意して様子を見ることにしよう。

ホロウも真面目そうだから、倒れる前に気付いてあげられるようにしよう。

「さあ、次で最後だね。しっかりとりを飾ってもらおうかな」

「そ、そう言われると緊張しますね」

立ち読みサンプル はここまで

「はははっ、ごめんごめん。いつも通り普通で大丈夫だから、じゃあお願いね」

「はい」

ロトンの番が終わり、いよいよ最後の一人が自己紹介をする。

サトラの隣に座っている彼女も、見た目で何の種族か察しがつくだろう。

優しく黄色い髪を左右で結び、エメラルドのように鮮やかな緑色の瞳をした少女。

尖った耳が彼女の、というより彼女の種族の特徴だ。

「初めまして、ホロウさん。ワタシはエルフ族のシーナです。得意なことは、料理かな。

サトラさんほどじゃないけど」

そう、彼女はエルフ族。

亜人種の中でもセイレーンに次ぐ希少な種族で、高い魔法適性と、人間の十倍以上の寿命を持つとされる。整ったその容姿は、見る者を魅了する。また魔法適性の高さは人間の

貴族を凌ぐとされていた。

「シーナには、僕と一緒に経済状況の管理をしてもらってるんだよ。彼女は僕より数字に強いからね」

「ウィル様、それは過大評価ですって。ワタシは補助をしてるだけです」

「その補助がとっても役立つてるんだよ。僕一人じゃ把握しきれないとこを、シーナが